

なまはげが教えてくれる大切なこと

最近、回転ずしチェーン店での非常識な行動が話題になっています。

以前までは寛容だった社会も、きっちり責任を取らせるという方向にシフトしてきています。もしも、子どもたちが近い将来こうした問題を起こせば、一生に関わる話になります。今日は、その予防になりそうなことをお話しておきましょう。

秋田の男鹿地方には「なまはげ」の文化があります。

鬼みtainな化け物が家に来て「悪い子はいねがー」「山に連れて行くぞ」などと怖がらせ、子どもは「お利口にします（泣）」と約束し、親も「すいません」「お利口にさせます」などと頭を下げ、ていねいに接します。

こうした一連のやり取りには、以下を教えるという人類学的な意味があると武道家・思想家の内田樹さんは述べています（参考文献：「おじさん」的思考 角川文庫）。

- ① 家の外には「家の仕組み」とは異なる「外の世界」がある。
- ② その「外の世界」は変えられない。

小さい子どもは「家の仕組み」を世界のすべてだと思っています。これは自然なことですが、成長するにつれて「家とは別の外の世界がある」ことを理解していくことが求められます。なまはげは今までの「家の仕組み」が通用しない「外の世界」を象徴する存在だということです。好き勝手しては許してもらえない「外の世界」があるという経験ですね。

併せて、そういう外の世界の仕組みは「そう簡単には変えられない」ということも学んでいくことが大切です。多くの人が共存するにはルールなどの仕組みが必要で、多少きゅうくつでも「みんなが少しずつ我慢すること」が大事になります。「外の世界」の象徴であるなまはげに対して、親が頭を下げ、ていねいに接することで子どもに「変えることが難しい外の世界がある」と伝えていくことになります。

このことがわかっていないと、外の世界でも家の中のようにふるまったり、わがままを言ったり、外の世界のルールを変えようとする恐れがあります。

頑張ったのに良い評価をもらえないのはおかしい、勉強したのに不合格なのは変だ、自分のテストに×をつけるな。そういう「ウソのようなホントの話」が増えてきたのは、ここ数年になります。彼らは「変えることが難しい外の世界がある」という実感が薄いようです。

先の回転ずしチェーン店での非常識な行動は、もしかしたら、家の外には「家の仕組み」とは異なる「外の世界」があり、その「外の世界」の仕組みには合わせて生きていくものだという一見当たり前とも思えるような「実感」が薄いために生じたのかもしれませんが。

年々、大人の中にも「外の世界に合わせて生きる」という箇所に違和感を覚える人が増えています。これも時代の流れでしょう。なまはげのいない現代において、子どもに「外の世界との接し方」をどうやって教えていくのかはけっこう難しい問題なのかもしれません。